



Title	フランツ・カフカの動物物語における音のモチーフ : 音楽・騒音・雑音と共同体
Author(s)	小松, 紀子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55688
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 小 松 紀 子 ）	
論文題名	フランツ・カフカの動物物語における音のモチーフ ー音楽・騒音・雑音と共同体ー
論文内容の要旨	
<p>本論文は、フランツ・カフカ（1883- 1924）の晩年の3つの動物物語『ある犬の研究』<i>Forschungen eines Hundes</i>（1922年）、『巣穴』<i>Der Bau</i>（1923年）、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』<i>Josefine, die Sängerin oder Das Volk der Mäuse</i>（1924年）（以下『ヨゼフィーネ』と略す）を研究対象とし、動物形象における音楽や騒音・雑音といった音のモチーフの観点から、カフカの晩年の仕事に再考察を試みるものである。</p> <p>カフカは世紀転換期のプラハの同化ユダヤ人である。民族問題に揺れたプラハの複雑な歴史的社会的背景を踏まえることは、カフカ作品をより深く理解するうえで欠かせない重要な視点だと考えられる。本論文では、当時のプラハの同化ユダヤ人が共通して抱えていた帰属意識の問題を中心にカフカの人生と作品との関連性を確認しつつ、晩年の3つの動物物語について考察している。</p> <p>序章では、まず本論文で問題とするカフカの動物物語における音のモチーフが、どのような問題領域にあるのか明らかにするため、カフカにおいて動物がどのような形象であり、音のモチーフとどう関係しているのかをこれまでの研究を踏まえて論じている。『ある犬の研究』では音楽、『巣穴』ではシューシュー音 <i>Zischen</i>、そして『ヨゼフィーネ』では歌が扱われており、一人称の動物の語り手によって聴覚体験が報告されている。しかしこれまで、この三作品が音モチーフを持つ作品群として総合的に解釈されることはほとんどなかった。従来の研究では、音楽が扱われている『ある犬の研究』や『ヨゼフィーネ』は、実存がテーマと解釈されてきた『巣穴』とは問題領域が異なると考えられてきたからである。近年、後期作品を動物ー芸術家物語群として総括する試みもあるが、そこでもなぜ動物において音楽が扱われるのか明らかにされていない。よって本論文ではまず、カフカの動物における音とは何を意味するのかについて考察している。レッシングの『寓話論』で定義されている寓話の動物と比較すると、カフカの動物は、人間世界の鏡像である寓話の動物とは異なり、その動物に特有の動物的な行動の描写に特徴のある形象であることが分かる。とくに一人称の動物形象は、知覚の詳細な報告をするところに特徴がある。これらの考察から本論文では、カフカの動物形象を、従来の研究で問題とされたカフカの文学の比喩としてではなく、音楽や音を身体感覚において把握し知覚を表現する形象として捉え、その身体表象について考察するものである。</p> <p>次に、カフカの音楽体験の報告についての考察から、カフカにおいて音楽は、音の美しさや芸術的な素晴らしさではなく、身体感覚において把握され視覚的に表現される音の影響力として捉えられていることが明らかにされる。聴覚はそれをどう聞かかという聞き手側の感覚が重要な感覚である。カフカにおいて音楽を描くということは、それがどのような音楽かという音楽や音自体についてではなく、聴衆側、音の受け手がそれをどう受け止めるかという問題として表されるのである。つまり、カフカの音モチーフを考察することは、その音楽や音を発する相手に対する聞き手の心情を考察することになるのである。よって、音に対する語り手の反応と心情が極めて克明に記述されている作品である『巣穴』もまた、『ある犬の研究』同様、音によって語り手と他者の関係性が浮き彫りにされる物語と考えられる。そして『ヨゼフィーネ』の語り手もまた、ネズミ族におけるヨゼフィーネの歌について報告している。このように、この三作品はいずれも一人称の動物の語り手によって語られる音の体験を描いた作品群であり、それぞれの作品ごとに音の体験を通してカフカの晩年のテーマ「個と共同体」の問題が表されていると考えられる。</p> <p>第1章第1節では、まず1911～1912年のイディッシュ演劇体験を取り上げる。日記の記述から、そこでの出演者も観客も一緒になってイディッシュ語の歌を歌うという行為を通して感じられた民族的一体感の体験が、その後のカフカの音楽モチーフに決定的な役割を果たしたことを検証している。次に、当時の音楽と民族をめぐる言説や、カフカの周辺の人々の活動およびカフカとの関わりを確認している。リヒャルト・ワーグナー『音楽におけるユダヤ性』やオットー・ヴァイニングャー『性と性格』、チェコ民族音楽とカフカを仲介したカフカの親友マックス・ブローートの活動などを取り上げ、物語の時代的背景を読み込んでいる。カフカの動物形象がユダヤ人と結びつけられる背景を確認</p>	

したうえで、『ある犬の研究』や『ヨゼフィーネ』の民族Völkがユダヤ人を指すという見解の妥当性を問い、カフカにおいて民族が語られるとき、どの民族が問題かではなく、帰属意識の問題であったことを導き出している。

第2節では、まずカフカの音楽モチーフ全般について考察している。カフカにおいて音楽は、有無を言わず引き付ける魅力的な、そして抵抗を許さず突如襲い来る暴力的で圧倒的な「力」として表されている。次に『ある犬の研究』の音楽について論じている。『ある犬の研究』の語り手の音楽体験の分析から、一方で音楽が『ヨゼフィーネ』へと通じる共同体や仲間集団を暗示するモチーフであること、他方で語り手が犬族共同体から疎外され追放されていることが音によって表されていることを検証している。さらに、『ある犬の研究』と『巢穴』に共通する、身体における音の衝撃の詳細な報告を比較検討することで、『ある犬の研究』の音楽から『巢穴』の雑音へと、聴覚モチーフが展開していくことを明らかにしている。

第2章では、騒音・雑音のモチーフと『巢穴』について考察している。まず第1節では、カフカの時代の騒音や雑音が当時どのように捉えられていたのかを、雑誌記事などへの考察を通して明らかにしている。ますます産業化機械化が進む世紀転換期は、騒音や雑音が社会的にクローズアップされた時代であった。騒音や雑音は精神や神経を圧迫し健康を害するものとして闘う対象であった反面、当時誕生した雑音音楽において、生の力を喚起する肯定的な音であったのだ。次に、『巢穴』以前の騒音や雑音のモチーフについて、1912年ころの日記の記述や『大騒音』『変身』の分析によって、騒音や雑音が父と結びついた権力の音であることを明らかにしている。さらに1917年のチューラウのネズミの夜の体験の手紙を検討することで、後の『巢穴』のZischenへと通じる、見えないものへの不安と音のカフカの中における結びつきを探っている。

第2節では、『巢穴』のZischenが分析されている。『巢穴』はモノローグで語られている。前半部への考察から「自己と他者」というテーマを導き出し、そのうえで語り手の推測におけるZischenの音源像の変遷を考察することで、他者を希求する孤独な語り手の期待と不安を浮き彫りにしている。語り手は巢と自らを同一視しているため、語り手が正体不明のZischenの音源像を求めて闇雲に穴を掘ることで巢が荒廃してゆく様は、そのまま語り手の心身の打撃を表すことになる。またここで繰り返し言及される「静けさ」は、他者との関係においては、「無音」という孤独を暗示する状態として表されていることも指摘している。Zischenは、語り手を悩まし不安をあおる音である反面、常に語り手の関心を引き付けてやまない音であり、意識下で求めている他者を暗示する音なのだ。

第3章第1節では、共同体に関する時代的背景とカフカの個人的な体験を確認している。己の民族的帰属の不確かさに悩むプラハの西方ユダヤ人青年にとって、東方ユダヤ人の宗教を核とした伝統的共同体は自分たちの本来の姿を体現していると捉えられていた。カフカにとっても東方ユダヤ人体験は、晩年の音楽と結び付いた共同体モチーフを形成する上で、決定的な役割を果たしたと考えられる。カフカが東方ユダヤ人に直接接する機会は二度あった。一度目はイディッシュ語劇団との出会いであり、二度目が第一次世界大戦による東方ユダヤ人避難民とユダヤ民族ホームとの出会いであった。このホームにカフカが惹かれたのは、その理念、セツルメント活動の実践であった。第1章および本章を通じて、イディッシュ演劇のときもユダヤ民族ホームのときも、カフカが強く惹きつけられたのは、決して思想的なものでも宗教的のものでもなく、子供のように無条件に受け入れられるという感覚であり、その根底には、何より自分の所属する共同体の包括性への憧憬があったのだということを導き出している。

第2節は、『ヨゼフィーネ』のネズミ族共同体における歌について論じている。この物語は歌手ヨゼフィーネと歌を理解しないネズミ族の関係が描かれている。ヨゼフィーネとネズミ族の関係は、一見「芸術家」と「芸術を理解しない大衆」という対立の構図を形成しているかのように見える。だが、ネズミ族がヨゼフィーネを「子供」と見なすことで、その構図は一転、「わがままに振る舞う子供」と「子供をいなす父親」という関係へと転換する。ネズミ族にとってヨゼフィーネは、同じ言葉Heißenを話す同族の一部でありながら、「老いた」民族であるネズミ族にあって特別な子供性の象徴でもあるのだ。そして失われた子供時代の幸福の幾分かを想起させるヨゼフィーネの歌は、ネズミたちを集合させ、民族共通の感情に浸らせることで、共同体の一員であることを実感する場を形成する。つまり歌を聞くというネズミたちの行為を通して明らかになるのは、音楽は社会的な力、大衆における民族的一体化の促進に作用する社会的機能として表されているということである。語り手の考察とヨゼフィーネの歌の聴衆への影響力の描写は、歌によって共同体にたいして対等に闘う個と、結局は一同胞として個を飲み込む柔軟で強い共同体の拮抗する関係を鮮やかに浮かび上がらせているのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小 松 紀 子)			
	(職)	氏	名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	三谷 研爾
	副 査	大阪大学 教授	片淵 悦久
	副 査	大阪大学 准教授	吉田 耕太郎
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： フランツ・カフカの動物物語における音のモチーフ
—— 音楽・騒音・雑音と共同体 ——

学位申請者 小松 紀子

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 三谷 研爾

副査 大阪大学教授 片渕 悦久

副査 大阪大学准教授 吉田耕太郎

【論文内容の要旨】

本論文は、フランツ・カフカ（1883-1924）の晩年の物語テキストのうち、一人称の動物の語り手が語るという形式を共有する『ある犬の研究』（1922）、『巣穴』（1923）、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』（1924）の3篇を取り上げ、そこにあらわれる聴覚表象の分析をとおして、カフカにおける個人と共同体の関係を明らかにしようとするものである。全体は、問題を提起する序章、『ある犬の研究』を扱う第1章、『巣穴』を扱う第2章、『ヨゼフィーネ』を扱う第3章、および結論となる「おわりに」の5章から構成されている。総ページ数は121ページ、400字詰原稿用紙に換算して約420枚である。

序章では、最初に上記3篇の作品の研究史が概観される。つぎに、カフカの物語テキストにおける動物形象について先行研究の論点を整理し、動物寓話の伝統から外れた、カフカ的な動物物語の特質を確認する。他方、カフカ個人の聴覚経験を日記・書簡に即して検討し、他者との関わりという問題が関連していることを指摘する。以上を踏まえ、物語テキスト内の楽音・非楽音イメージを、作家の共同体理解と関連したモチーフとして理解する本論文の視座が提示される。

第1章は、カフカがイディッシュ語の演劇・音楽をとおして、東方ユダヤ人の民族文化に触れた経緯を確認するとともに、20世紀初頭のプラハで流通していた音楽と民族の一体性をめぐる言説（ヴァイニングァー、ヤナーチェク）とのつながりを検討する。そのうえで、『ある犬の研究』のテキストを分析し、音楽モチーフが共同体から個人を排除する、理解不可能な〈力〉の表現となっていることが指摘される。

第2章は、非楽音（機械音）が増大する20世紀初頭の都市環境のなかで育ったカフカ個人の聴覚的体験にふれたのち、『巣穴』にあらわれる音源不明のノイズ *Zischen* が、孤独に安住している主人公にとって、他者にたいする不安を喚起すると同時に、他者を希求する無意識の表徴にもなっているというアンビヴァレンツを、物語テキストに即して明らかにする。

第3章は、晩年のカフカが示したユダヤ人民族ホームへの深い関心の由来を、当時のプラハのドイツ系ユダヤ

人のあいだに浸透していたシオニズムとの関連から検証し、カフカの共同体願望を確認する。だがカフカの場合、そうした願望にはつねに振幅を伴うものであることが、『ヨゼフィーネ』のテキスト本体をなす歌姫と一般聴衆との関係の錯綜した記述の検討から明らかにされる。

「おわりに」では、以上の議論を総括し、カフカの共同体へのアンビヴァレントな帰属意識が、3つの動物物語において、主人公たちを引きつけると同時に拒む聴覚イメージの表現と深く連動していることが指摘される。

【論文審査の結果の要旨】

カフカの物語テキストに頻出する動物形象については、すでに長い研究の蓄積がある一方、聴覚イメージをめぐる検討は1990年代以降、表象文化論の深化にあわせて取り組まれ、とりわけ近年、新しい成果が相次いで発表されている。本論文はそうした研究状況を見据えて、これらふたつの方向性を結合させたモチーフ研究を企図したものである。そのさい、カフカ自身のイディッシュ演劇・音楽との遭遇をとおして得られた経験を重視するだけでなく、20世紀初頭に流通していた音楽にかかわる言説、さらに非楽音をめぐる言説をも視野に収め、当時の社会文化史的コンテクストを参照したうえで物語テキストを分析する複眼的な作品研究の構想は意欲的であり、高く評価できる。

具体的な分析にあたっては、それぞれの物語テキストに寄り添うことで、語り手の屈曲の多い思考の脈絡が、丹念に追跡されている。こうした地道な手法により、カフカの音楽やノイズにたいするアンビヴァレントな姿勢が確認され、ことに『巢穴』の検討において、きわめて説得的な解釈を提示している。

本論文はこのアンビヴァレンツを、民族共同体にたいするカフカの両義的な姿勢と重ね合わせて捉えているが、そのさい具体的な参照項として東方ユダヤ人を設定している。カフカにおけるユダヤ性の問題は近年、資料の発掘とあらたな検証がすすんでいる領域であり、本論文もまたそうした成果をよく踏まえたうえ、物語テキストにおけるモチーフ研究を、「個と共同体」というカフカ文学全体を貫くテーマに統合して理解する立場を獲得している。

他方、聴覚経験を身体的知覚として捉える一方で、自他関係の表現としても解釈するというアプローチじたいの妥当性について、より立ち入った考察があつてしかるべきである。また、社会文化史的コンテクストの重視に比して、カフカの創作段階の区分などは軽視されており、最晩年の3作品に限定して考察をすすめることの必然性とその作家論的な射程について、周到に論じきれているとは言えない。結果として、結論部の記述が一般論に流れるきらいがあり、重複や反復が散見される論文構成上の弱さとあわせ、もの足りなさを否めない。

これらの問題点を含むものの、本論文が提示した知見はカフカ研究のさらなる展開に寄与するものであり、論文として十分な学術的水準に達している。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。